

シムペーター経済学の方法論的一考察

浜 崎 正 規

- 一 問題の提起
- 二 現実接近と学的整序
- 三 対象処理の方法論的考察
- 四 「与件」と経済動学の問題
- 五 結論的覚書

一 問題の提起

本稿の課題は理論経済学が対象の処理に当ってどのような態度を採ってきたかを反省し吟味を加えてみようとするのが目的である。いわば方法論的反省を通じて理論の現実性を要請するのである。現在近代理論経済学が「理論的枯涸病」"theoretic drought"にさいなま

れつつも経済生長の理論、変動の理論といわゆる動態理論の原理的な反省に立っていることは、周知のところである。しかしながらその反省の基点が、どこにおかれるか、ということについてはなんら一致するところはない。

ともかく理論経済学が「科学」としての体系を維持しようとするからには、その理論経済学が処理する対

象の認識を原理的にどのような方途にもとめるかが前提として問われていなければならない。そうして、その答案が真に「科学」としての性格を満足させるものでなくてはならないことはいうまでもない。といって決してその答案は超歴史のものとして作成されるものであってはならず常に、歴史的な問題意識をばらんだ、いわば実践的要請をになった相としてあらわれなければならない。ケインズ経済学の革命的意義がL・R・クライン (Lawrence R. Klein) のいうように所得決定の貯蓄——投資理論にあるとすればケインズの決定的な資本主義の認識は所得メカニズムに思想の焦点が存在しそこにこそ歴史的問題意識の径路と同時に学問的体系の科学性の根拠があったということができえよう。

さて近代理論経済学の動学理論上におけるガンはいわゆる「与件」(Data, Datum) 要因の処理の問題である。なるほど革命、立法、財産、契約関係、時間、人口、技術、等いわゆる経済外的要因について、純粋理

論経済学者は、それを攪乱的要因乃至与件として取扱い、これを説明することを目的とせず、ただその作用の仕方や結果を分析するに止めようとしてきた。しかしながらこれらの「与件」と称せられるものは、多くは全く未分析の要素である。そうしてわれわれの日常生活の経験世界においてそれは、重要なエレメントとして意識されるのである。「どのような現象が与件として見なされなくてはならないものであり、そうしてどのような現象がこれらの『与件』によって説明されなくてはならない量であるかということ、前もって明確に決定することは不可能なことである。昨日の理論が『与件』として認めたところのものを、今日は、われわれはそれを説明しようとする。いわば今日説明の基礎とする独立変数は、明日になれば従属変数となるかもしれない」とG・V・ハーバラー (Gottfried V. Haberer) がいうように、われわれが「与件」を設定して現象の推論に供えることは、一応問題の擁立には役立つことができよう。しかしながらそれは、

あくまでも現実接近のための一手段である。いわば「今日説明の基礎とする独立変数」は、明日の現象説明には不都合となり根底から覆えるかもしれないものである。すなわち従属変数となるかもしれないわけである。したがってハーバラーによればそのことは一定のシエマを構成した上での現象の認識および理解の試図にすぎないということができよう。このように考えてくると、理論経済学の学的秩序の生命は、まさしくモデル組立に終始するということができるであろう。これに反し、マルクス経済学では「与件」を設定して推論することをしなはいとわれている。すなわち経済の中心的部分の説明から漸次他面に拡大して、いわゆる「与件」とされる現象をも統一的に説明する。³⁾例えば「時間」の要素にしても、純粹経済理論が独立の要素と考えるに對し、マルクス経済学では、経済のうちにすでに最初から入っている。しかもその場合、「時間」要因が経過するか否かに問題の所在があるわけではなく、いわばそれ自体なんらの興味をもつものではな

く、経済の変化自体が重要な意味をもつのである。いわゆる純粹経済理論上の「与件」としての「時間」要因は、厳しい経済事実の精髓にあるわけである。

そのように、純粹に経済的なもの、(Ökonomisch Wirtschaftlich)の追究にもとづく関連記述の経済学は、自から歴史性を、意識的に捨象したといわれる。しかしながら経済の歴史的基盤が大きく動揺する段階においては、歴史的規定性の意味づけをもたない科学的理論は、根底から反省されなければならない。すなわちここに動態論、景気変動論研究の意識的・無意識的な要請があるわけである。すなわち歴史事実としての経済への接近化が、顕現するわけである。J・A・シュムペーター(Joseph Alois Schumpeter)の「景気循環」(“Business Cycles”, 1939)の副題——資本主義過程の理論的、歴史のおよび統計的分析——をわれわれは、このような観点から捉えなければならぬ。しかしながら彼が、ここに展開した論理の基底には、すでに彼の学問的秩序の方法に宿る事実分析のための限界的な

信号燈が灯っていたのではなからうか。いわば問題意識（ヴィジョン）からする武器の性格自体に、現実接近にとつてこえることをえないクラックが、存在したのではなからうか。このことから彼の分析に対してともすれば「歴史の理論的研究でなく、理論の歴史の説明である、彼の純粹經濟理論が歴史事実によって説明されているが、資本主義經濟がいかに現われ、変化してゆくかという生きた歴史は浮び上っていない。鋭い刃物のような理論的『道具』の幾つかが經驗的事実を切つてみせることによりその鋭さが示されている。あるいは理論的、觀念的につくり上げた標本のようなモデルに英米独のペンキを塗りそれぞれの感じを出そうとしているが、生きた現実感は「てこない」という非難が生れるわけでもあろう。だからといって、シュムペーターが決して歴史そのものへの深い反省をなすことを怠つたわけではない。われわれがこの小論を試みたのは、彼のその反省の基盤を究め彼の武器が宿命的に宿すクラックの所在を明らかにすることにある。彼

はしばしばマルクス經濟學との関連において論議されるのであるがわれわれは上の課題を追つてゆくことはまた一面シュムペーターという「窓」からマルクス經濟學の理解を深めようと企てることになるかもしれない。經濟學が真に學派的抗争をするというのは、全く切磋琢磨の意味でなくてはならない。いたずらに人々を思想的混乱のつぼにおちいらしめ、相手を政治的立場よりなす誹謗や、自己の分野を固執するあまりにおいてなされる抗争は、われわれが撰ぶ徑ではない。學問的実りを願う以上、それぞれ深い方法的反省においてなくてはならない。シュムペーターが、いわゆる対象認識の學問的系列を辿つた過程（主としてここでは彼の“Science and Ideology,” 1949 を中心とする）を、この小論では対象処理の「目的」・「手段」にかかわつて、彼の思惟方式を究めようとするのもそのためである。そこにおいて、新しい動學理論のためになんらかのアイデアをみいだすようですがもなれば、という全くささやかな望みにすぎない。

二 現実接近と学的整序

経済秩序は自己目的をはらんでいると同時に歴史的な個性的内容をもっているということが出来る。しかもまたその個性的内容は歴史的現実のオートノミーな領域において顕現するということが出来る。したがって経済学の使命が現実の経済秩序を問題とするかぎりにおいては、まずそのことを明確にしうるものでなくてはならない。しかしながらそのような経済秩序の認識は、あくまでも直観的反省の洞察によって意識の過程に入る。けれどもその洞察によってもたらされる理論形成のための素材が一体どのような方法によって構成されるのかという問題が起ってくる。いわば現実の経済秩序に対して直観的反省をなすことによつて「科学」的な要求として起ってくるいわゆる認識手段が論理的に問われなければならないことになってくるわけである。われわれが経済現象として経験するということとは、その現象の形態が経済的な意味をもつものとい

う認識に立つて意識の座に据えていることである。いわばわれわれは、経済的なるものという認識にもとづいて、経済的諸現象の撰択・整序にあたりそうしてその機能、構造を統一的にしかも論理的に、把握しようとして企てるのである。そこにこそ理論の形成される原理的な「場」が存在するわけである。

さてわれわれが、ここで問題とする理論経済学の理論的要請の「場」において、諸現象の撰択および整序の認識手段は、一体どのような方途に求められているのであろうか。われわれはいわゆる「与件」概念の分析に、余儀なく入らないわけにはゆかない。すなわち経済的なものが、所与のものとしての「与件」から説明されるかどうか、またいかなる現象が「与件」とみなさるべきか、という整序上の手続の問題が存在することになるのである。われわれが経済的現象と非経済的現象として一線を画し、区別をするということは、ハーバラー教授の説くように全く経済学上の便宜的慣例的なものとしてかたづけられてよいのかどうか、という

方法論的問題にもかかわりをもたざるをえなくなる。われわれは理論を進めるに當つて、その「与件」概念の分析をシュムペーターの述べる所から入つてみよう。彼は経済秩序のための外部的要因 (external factors) と内部的要因 (internal factors) との區別について「経済体系の活動に直接に起りがちである諸現象と、経済体系上に作用する他の社会的要素の力によつてつくり出される諸現象との間に一線を画すことは、差し支えないことである。この相異は、A・シュビートホフ (Arthur Spiethoff) によつて、内生的諸要因 (endogenous factors) と外生的諸要因 (exogenous factors) との間に画されたものとは厳密には同じでない。しかしこれらの、そうしてこれらに類似する区別の基底をなす分析の原理は、すべて同一である。それらの區別は、われわれが直面しているものが、経済過程に内在的でない諸事象によつて攪乱せしめられている経済過程である、という事実を表現しようとするものである。厳密に何が経済過程に内在的であるかということは、もちろんわれわれがそれをどのよう

に限界づけるかに依存している」と述べている。まさに彼が学的整序を前提として経済秩序のための認識態度を表明した論述ということができよう。ともかくシュムペーターは、経済過程に内部的でない諸要因との関連において、外部的なものの現象を把えようとしている意図は明らかである。しかしそれは、彼の場合純粹に動学的経済理論の任務とするところではなく、経済社会学の課題であつた。そうして彼にとっては、経済過程に内部的であるとして限界定立づけられて経済秩序の動態性を認識する要因が他に存在したわけである。したがつて彼には、経済的として分類されない諸勢力、諸変動が純粹経済理論から區別されたとしても、決していわゆるローザンズ学派的「与件」の概念に満足をなすのではなくして、きわめて経済秩序の歴史性との関連において構想されているということができよう。この点については後程ふれる考である。われわれはなるほど、何が経済過程に内部的であるかとして定立される要因をみいださねばならない。しかも

その要因は、経済的な意味(歴史的経済的意味)において限界づけられるものでなくてはならない。とすればシユムペーターの学説構成上における内部的要因及び外部的要因を、どのような論理的性格から認識すべきであろうか。われわれはこのことからして論を進めてからかねばならない。さて彼が、経済発展の根本現象を説明するにあたって『発展』とは専ら経済が自己自身から生む経済生活の循環の変動、『自己自身に委ねられ』て外部からの衝撃によって動かされていない所の国民経済に起り得べき変化のみが理解さるべきである。若しも経済的領域そのものに於て成立する変動原因が存在せず、又実際上では、経済的發展と呼ばれている現象にしても実は全く経済の与件の変化にのみ基づいたりまさに又経済はこの変化に漸進的に適應するに過ぎぬことが明らかになるならば、われわれは其処にはいかなる経済的發展もないというであろう⁹⁾なぜならばもし経済の「与件」の変化にもとづき、またその「与件」の変化に漸進的に適應する国民経済の發展

であるならば「その最内面的本質に至る迄毫も経済的に説明さるべき現象ではなくて、夫れ自体發展なき所の経済が其の環境の変化の中にいわば捲き込まれたものであり、發展の根拠従つてその説明は、経済理論を通じて原理的に記述される所の一群の事実そのもの、の外に求められねばならぬ¹⁰⁾」からである。われわれはここに、彼の「与件」の概念とそうして経済の内部的なものとの認識が、何であるかという緒をみいだすわけである。すなわちシユムペーターがいう内部的は、『経済』体系内部的(imersystematisch)でありしかも非連続に行われ、そうしてその常軌(Frame-work)を變更し“circular flow”からしては説明出来ない変動およびその結果として生れる諸現象こそ、彼の問題設定の要因であったのである。したがつてその要因にもとづく経済現象こそ、経済的(ökonomisch)およびwirtschaftlich)に説明されるべきものであり彼の経済学的認識の対象であったことはいうまでもないことである。しかしながらそれは、あくまでも純粹に動態理論

の形成のためであることを、われわれは理解してかか
らねばならない。一見したところシュムペーターの前
の論述は、体系内部の純粹経済的要因に問題設定をな
すためその要因の歴史性は、すでに捨象されているか
のようである。けれども彼の関心が、純粹分析を一定
の選択せられた発展の問題に拡張することにあつたと
考えられるなら、経済的に説明され、分析されるべき
事象現象は経済体制内の時系列なものとして彼には認
識されているように思える。したがってA・アモン(A・
Fred Ammon) のいうように「経験科学は凡て或る種
の事実上の問題に関係し、実際これらの問題と共に存
在するようになるものであつて、これらの問題に伴つ
てより以上に発展するようになるものたること、而し
て斯学の論理的構造に関して絶えず反省を続けるなら、
これらの事実を全く無視するわけにゆかず、却つて、
具体的な事実上の問題から又これらに直接、關聯して斯
学の固有の性質及び斯学の概念的に決定すべき対象を
確定せねばならぬ、(マックス・ウェーバー、シュム

ペーター)ということをして以て満足しなければならぬ」¹¹⁾
ことになるのである。すなわちシュムペーターの經
済科学の論理的認識条件は、「これを直接科学から、
即ち斯学と共に初めから与えられておつて斯学の本質
的な核心および内容を成しているところの斯学の具体
的問題及び結果から獲得することが出来るに止まる」¹²⁾
ということが出来よう。しかしながらシュムペータ

ーが、このような要請を真に満足せしめたか否かは、
論理的に別の問題である。その検証は、彼の所説の
展開の思考過程にしたがつて追究して後明らかにせら
れるところである。ともかくアモンがいうように、シ
ュムペーターは歴史事実にかかわつて科学の擁立を構
想したことを、われわれは認めなければならぬであ
らう。といつてもその場合、真に歴史意識を包摂した
ものとしてか否かを意味するのではない。彼が純粹に
「経済的なもの」を要求して純粹経済理論を企図する
場合における歴史性の包摂と、歴史意識の範疇からの
対象分析による科学的処理とは、明らかに論理的に異

るものである。ここにシユムペーターが「理論の歴史の説明に終った」と非難される問題起点があるわけである。すでに別の場所で指摘したように、彼は資本主義社会をきわめてマックス・ウェーバーのいうような意味において合理性の追求過程とみなしている。そうして「資本主義・社会主義・民主主義」(Capitalism, Socialism and Democracy, 1942)において「資本主義とは、それ自体動的現象であつて決して静態的でないのみならず静態たり得ないのであり、又完全競争というものは現在においても決して現実的でありえなかつたことは明白である¹⁴⁾」というときシユムペーターは、歴史というものに深い信頼をかけていることを識ることが出来る。しかし彼のその歴史観は、きわめて樂觀的な弁証論理に支えられていることが出来るのであるからうか。なぜなら資本主義社会の終焉を語るにしても「資本主義過程はそれ自らの制度的枠を破壊するばかりでなく、次に来る他者のための諸条件をも創り出す。従つて破壊(Destruction)」という言葉はやは

り適当な言葉とは云えない。私は転形(Transformation)として語つた方がよかつたかもしれない。その過程の帰趨は、出たらめに出てくるものによつて充たされるような単なる真空ではない。事物と魂が社会主義的生活態度に益々適合し得るような仕方であらう。これらの点でマルクスのヴィジョンは正しかった¹⁵⁾と述べなければならぬ立場にある彼をみる時明らかである。といつてシユムペーターが、マルクスのヴィジョンに讃成した径路からして直ちにマルクスのヴィジョンに呼応する武器が樂觀的歴史観に支えをなしていたとわれわれはいうのではない。もちろんマルクスの資本主義社会崩壊の論理とシユムペーターのそれとは、全く逆な理論の展開をなさしめた。けれども両者がともにその論理を経済社会構造の内発的因素に拠点を置くことによつて、それぞれ達した科学的な終焉の曲であることに視点を同じくしている様相をうかがいしらねばならない。われわれは先にシユムペーターが、樂觀的弁証論理に支えられていたと述べた。このことは

彼の動態理論の基底とする、いわゆる新結合の遂行 (Durchsetzung neuer Kombinationen) の担手として
の「企業者」(entrepreneur) の理論的性格を考察する
るとき明らかになるであろうことは、別の場所であ
らう¹⁶⁾。

さてわれわれは、経済秩序の経済現象をとらえるに
その歴史的認識という意味合いにもとづきシユムベ
ーターの態度を一考してきたわけである。いわば経済
的なものの純粹抽象という型においてであった。そう
してそれが歴史性という連関裡に把えることが可能で
あるか否かという問題でもあった。そこでより問題を
展開して、シユムベーターが意図する純粹に経済的な
ものの処理をいわゆる動学にかかわってどのようにな
したか、そうしてそのことは、現実接近のための認識
乃至理解に可能であったかを反省してみることにする。
そうして彼の「与件」概念は、純粹経済的内部的要因
との関連においてどのように考察するのが真にシユム
ベーター経済学の理解を深めることになるのであろう

か。これに答えるため、われわれは B・S・ケアステ
ンズ (B. S. Keirsteud) の「経済変動の理論」(“The
Theory of Economic Change”, 1948) 第二部経済変動
の一般理論——第四章所与の原因についての理論——
の所論をめぐって考察を深めることにする。

三 対象処理の方法論的考察

O・ランゲ教授 (O. Lange) は、固有の意味の資本
主義経済発展の理論をシユムベーターとマルクスにお
いてのみみいだしている¹⁵⁾。また P・M・スウィージー
教授 (Paul M. Sweezy) 自身も両者のいわば「発展の
理論」が経済体制自体の内発的なものであり、それが
ほかならぬ資本主義の経済発展の理論であるというこ
とからしてこれを認めるのである¹⁶⁾。しかしながらシユ
ムベーターが「一定の時間にまたがっている経済変動
過程の理論モデルを構成する²⁰⁾」ところに動態理論の「
本質的事実」としての内容が存する、という場合のい
わば経済動学のためのアウトノミーな領域を定立し

ての理論的要請に対して、マルクスの経済発展の動學が、『社会的総資本の再生産と流通』の過程における対抗関係およびその内在的矛盾の分析に課題が存在する、きわめて社会の全面的な領域に涉つての内面的連撃におよんで展開されたところに比せられる場合、

真にラング、スウィージー教授の言葉は、果して積極的意義をもつものとしてうけ入れるに価するかどうかを吟味する必要があるのである。すなわち経済体制内発的な発展といつても、そうしてよしんばスウィージー教授の言に従うにしてもわれわれは、シムペーターとマルクスがそれぞれ問題意識自体から生ずるところの「方法」の領域に自ら差異があり並列的或いは対置的な様相としては、把え難い明確な限界の赤線が画されているといえると思う。したがってわれわれは、その意味において消極的な意味に味わい解しなくては論議の展開上W・J・パーモール教授(William J. Baumol)の『経済動態論』(“Economic Dynamics”——

An Introduction——1951)第三章「マルクスおよびシムペーターの動態論」(The Dynamics of Marx and Schumpeter)の所論を水先案内として立たしてみよう。パーモール教授は、マルクス学説の体系は包括的な歴史的動態理論(comprehensive historical dynamic theory)を構成することにおいて、最も近代的な試みである。しかしその広範な理論体系としての容貌をうけ入れているマルキストにとってさえ、多くの瑣細な点において不満足なものが存在すると指摘し、そうしてこの点は、マルキスト諸学者の意見の一致する所であるとスウィージー教授およびM・ドップ教授(Mainrice Dobb)をあげている。一方シムペーターは、すぐれて興味のあるしかも重要な歴史的動態論についての分析作業を試みたが、それは体系の一部分として形成している。そうして彼自身は、その分析がマルクスの動學とよく調和をなしていると、信じていたし言明もしていると述べている。²¹⁾われわれはパーモール教授のこの所論から、解決の緒をたぐりよせることが出

来ると思う。すなわち私見によればシユムペーター学説の体系が静学・動学をあわせもつという意味において、二元論をなしているということは、いわば現実の接近化のために一応一定の理論的シエマ¹⁾ 仮設をもつてのぞみ、(もちろんそれが現実²⁾に則したものと考えられる限りにおいて) その仮設定立と現実の趨勢的動向との距離の把握に、自からその「瞬間描写的」な理論的現実からぬけ出るのであった。そうして、歴史的現実の一層底面に則した純経済的要因に開眼することに、おいて、真に理論の具体性³⁾ 現実への接近化を要求すること、すなわち動態理論の形成を企図した、と解するのが当を得たシユムペーター体系の構造理解である。このように考えるかぎりにおいて、マルクス学説の体系との「調和」は一体いかなる地点においてもとめられるのであろうか。われわれはまず、この点を吟味してみなければならぬであらう。このためいささか迂回的な径をえらぶことになるであらうが、科学方法論についてのシユムペーターの論述に従ってみることに

する。「経済学的たると否とを問わず、およそ分析のもたらし得るものは、ただ実在の類型の中に見出される諸傾向 (tendencies) の叙述に外ならず、決してそれ以上ではない。そしてこれらの諸傾向は、将来そこに何が起るかを教えるものではなく、ただそれが吾々の観察した期間におけると同じように作用し続け、しかも攪乱する要因が全くないとすれば、将来そこに何が起り得るかを教えるものにすぎない。『不可避性』

“inevitability” とか『必然性』“necessity” とかいう言葉も畢竟これ以上のことを意味し得るものではない。』²³⁾ と彼がいう時そこに論議の所在をとらえることが出来るといえよう。すなわち本源的に経済的実在としての現象の類型は自からその社会経済的領域内の内生的な秩序の一環としての要因という意味を担っているものである。経済学はそれの統一的叙述²⁴⁾ 法則の定立にあるということである。しかしながらこの点についての向坂逸郎教授の次の所論はマルクス経済学者の説として興味がある。「このような叙述の中に社会科学に対

する誤った考があらわれている。例えばシュムペーターは、社会科学の分析のもたらしうるものは「ただ実在の類型の中に見出される諸傾向の叙述に外ならない」と考えている。しかしここで問題となるのは、このような「諸傾向」が一定の条件のあるところには、必ず生ずるかどうかということである。一定の条件のもとで必ず生ずるならば、それは必然的に生ずるのである、問題はそこにあるのである。それをはっきりいわなければならぬ。もし生じうるだけであって生じないかも知れないならそれは必然的ではない。その代り、科学は成立しない」と批判を下しておられることである。教授がマルクス経済学に学問的起点をおかれる優れた学者であることはわれわれの認めるところである。しかしその批判のための武装、尺度はあまりにもシュムペーターの社会科学方法論の立場を解そうとなされる態度に、まことにシュムペーターにとっては、あわれというほかはない。なぜならば教授が一定の条件のあるところには必ず「諸傾向」が生ずるか否かと述べ

られている場合のいわば歴史的な因果関係の系列にかかわるところの必然性の原理に基点をおいて批判をなされる立場と、シュムペーターが分析のもたらしうるものは、類型の中に見出される「諸傾向」の叙述に外ならないという場合、彼は経済的現象としての類型の中にみいだされる「諸傾向」の叙述に傾向法則の定立の究明にあると考えている態度からして、諸傾向の存在はすでに一定の条件下において規定性をもつのである。したがって彼が、攪乱要因が存在することなく「吾々の観察した期間におけると同じように作用し続けるとするなら」というときにみられる一定の条件下における“inevitability”および“necessity”と、若し攪乱要因が存在する場合における条件をわれわれが第二次的条件と呼ぶことを許されるとするならそれにもとづいて起るであろう歴史的生成が何であるかという“necessity”, “inevitability”とは全く論理的に異なるものであるといわなければならないであろうし、それは全くカテゴリーを異にするということができると思う。した

がって向坂教授が「シュムペーターのこの著述（『資本主義・社会主義・民主主義』をさす—浜崎）の最大の欠陥

の一は、社会的法則の必然の問題について充分なる理解を示していないことになる。必然の法則のない所に科学はないことを知らない点にある。……科学者は、社会について必然的法則の存在を否定するか肯定するかを決定しなければならぬ。否定するならば、彼は科学者たることをやめて一種のニヒリストになる。科学者はこれを肯定する外はないのである」と辛辣な非難をなさっておいてになるが前に述べた所から明かなようににわれわれがいう意味における第二次的条件下による“necessity” “inevitability” をきわめて「原因」——「結果」の自然法則的因果関係の擁立において把えておられることによつてはじめて生れてくる酷評であるといわなければならないであらう。われわれは別の論稿でふれたように「科学者」としてのシュムペーターの学説を吟味するに決して躊躇をはさんではならぬ。いよいよ彼の社会科学方法論を検討することに努

力しなければならぬ。

シュムペーターは一九四九年 American Economic

Review 誌に「科学とイデオロギー」なる論文を発表した。彼がこの論文において問題としてとりあげたのは、まさしく科学方法論上に入りこむイデオロギー的偏向とそれが科学者の対象認識の学的整序において意味をもつヴィジョン (vision) との関連において検討されていることである。すてにわれわれはマックス・ウェーバー (Max Weber) によつて現実認識としての理論と、理想の設定を前提とする政策とが、混同してはならぬ二つの次元の上に立つことを指摘されたことをしつづる。(“Die Objektivität sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis”) さうしてウェーバーにおける「学問」の体系が倫理的な価値判断を排除したいわば「没価値性」にあることを、近代理論経済学上においてわれわれが認めるところである。シュムペーターが「われわれの学問の領域において研究者がその科学的作業のみに満足せず作業の中に価値判

は、研究の対象を指示するためになされる行為であつて、それ自体は学問的行為ではない。前学問的であるけれども前分析的ではない。……これらの事實は、われわれに正當づけうる関心を附着する意味をもつものとして、認められねばならないがこのことは、われわれの想像または、常識による若干の分析的な仕事を含んでいる。この知覚と学問的な分析との混合物を研究者のヴィジョン乃至直観とよぶ。事實われわれのヴィジョンは以前の学的分析の結果の少くとも若干を含んでいるであろうが、ともかく学的作業を開始する前に存在している。²⁵⁾」なるほどわれわれは、経済学の学的形成過程においてシユムペーターのいうようなヴィジョンに立たされていることを識る。そうしてあらゆる直観が現実の経済現象の正確なまた厳密な認識の上に成立するものであり、しかも地盤を現存在においてのこととして疑をはさむものではない。また彼は次のように続ける。すなわち「もし自分がヴィジョンによって与えられた材料に関して作業する学問的分析を

『モデル組立』“model building”と同じように視るならば、私は『モデル』という言葉にきわめて広い意味を与える。『モデル組立』は、特定の事實を抽出し分類によつて結合し、この先ず把握された事實の補充乃至取替のために他の事實を蓄積し、知覚された關係を定式化し、改良するにある。事實は分析的用具を暗示し、分析的用具は新しい事實の承認に導くともいうるであろう²⁶⁾」と。ここにおいて展開されたシユムペーターの分析用具の作出の経過は、その事象の認識、理解のための近代理論経済学の手段的性格を明かにしたものであると云うことができる。それはウェーバーが文化科学における「法則」をあくまでも手段的性質として強調したように、われわれは以上の考察からして向坂教授の非難には、かえつて次のシユムペーターの一節を引用して非難の次元のマトが相異することを明らかにするのが適當であろう。「吾々の結論や信頼度に対しては、更に一つの制約がある。社会生活の過程は、その多くが測定等といったことのできそうにもないよ

うなきわめて多くの変数の函数であるから、単に一定の事態を診断するということすら疑わしい事柄となる。ましてや吾々が予見を試みようとするや否や、そこには恐るべき誤謬の源泉が待ちかまえていることは言うまでもない。とは云えかかる困難を過大視してはならない。……画面の中の太い線は明かに一定の結論を支持するものであり、これにいかなる制約が附加されねばならぬにもせよ、それはなお極めて強力なものであって、ユークリットの命題と同じ意味では証明され得ないという理由によって拒否し得ないものである³⁰⁾この叙述からして彼が「社会的な予見の試みにおいて重要なものは、事実と論証とを集約した上で遂に到達される『イエス』か『ノー』ではなく、かような事実と論証そのものである。究極的結果において科学的なものについては、それらの中に含まれている。それ以外の一切のものは、科学ではなくて予言である³¹⁾」と、ここにおいてわれわれは、彼が科学の自律性のために、抽象化された「理念型」に仕上げられた理論と事実現

象との乖離を卒直に認めていることを識らなければならぬ。そのことはすでに『科学とイデオロギー』においてわれわれは、自ら科学形成の手続としての過程として肯えるところであつた。したがって事実と論証を集約した上で遂に到達される「イエス」・「ノー」であるならば、すでにシュムペーターのいう「科学的」は価値判断の序列の決定下におかれることになるわけであつて彼の意図する社会科学の定立は存しないことになるわけである。「経済学的たると否とを問わず、およそ分析のもたらし得るものは、ただ実在の類型の中に見出される諸傾向の叙述に外ならずそれ以上ではない」というとき、社会科学がいわば現象分析を試みるに当ってヴィジョンのうちにイデオロギー的偏向を導入することを拒み、その作用するを否定することにおいて学問的分析の歪曲化をふせぐこともあつた。このように彼の所論にしたがつて考えてくると、ともあれシュムペーターの経済学説展開のための学的整序の方法は、「没価値性」の原理に立つた近代経済理

論の領域においてのみ理解されるべきであることは明らかである。このようにしてわれわれは、理論経済学者としてのシュムペーターの位置づけを試みてきたわけである。では彼がしばしば問題とされてきた、いわば動学体系上のマルクスの接近について、論をあらためていわれる「与件」と「内在的要因」との関連についてケアステッド教授の所論をめぐってこれを取りあげてみることにする。

四 「与件」と経済動学の問題

経済学がしばわ学派的対立抗争のつばに追いこまれていくことをわれわれが自覚するとき、その上層建築を批判吟味することは、その解決にとって必要不可欠の要件であるかもしれない。しかしながら同時にこれのみによって満足されるものとは思われないであろう。なぜならばそれら上層理論がその理論的基底の論理的性格からして発展のピークにあり、それ以上の進展をみせずまたのぞみえないものでさえあるという

ならその現状の到達地点における相をとって学派の価値評価をなすことは、あなたがち否定することはできないかもしれない。しかもまたその上層の理論が論理的基底のうえに正しく据えられそうして理論構成は歪められずになされているか否かの吟味を経たのちでなければそのことはなんら意味をもたない。われわれはこのような気持からシュムペーター経済学の上層理論を考察するには、いわば対象処理の論理的性格を尋ねようとしたわけである。もちろんこの場合、「現象」の個別的本質認識が前の段階として哲学的に思考されておらなければならぬであろう。けれども「科学」が成立しうる手続の過程においては、そのことは所与のこととしてかくされていってよいものであろう。

さて前にものべたようにシュムペーターの経済学自体は現実の経済事実の認識ないし理解を十分に満足せしめるものでなくてはならない。ルッツ (E. Lutz)、ランゲおよびバーモルにしてもシュムペーターとマルクスを視界に入れて考察するに資本主義の内発的景気

循環にもとづく考慮から両者を対等に論議する。しかしながらわれわれが前節でのべたようにそれはきわめて消極的な意味において解する必要があるのではなからうか。この点についてはいよいよ論義を展開してみなければならぬ。そのためシユムペーターという「窓」の学的整序の方途を通してマルクス経済学の体系を浮び上らせることに努力しよう。

さきにシユムペーターの態度がマックス・ウェーバーの「没価値性」の原理に立つといった。しかしながらシユムペーターの方法論の場合、現実分析の理論と結びつくヴィジョンが考えられていたことを想起しなければならぬ。もちろんヴィジョン自体は「理想」と同一のものではありえない。けれどもしばしばそれは合体して理論の構成にあたって意識の基底にひそむことは考えられる。マルクスのヴィジョンが何よりも近代社会の動態的特質を的確につかむところにあった。シユムペーターの経済学的使命が「革新の経済学」の樹立にあったとするならば、石田興平教授が示唆され

たように、いわば「生」(Leben)の根底にもとづく資本主義の存在論的思考において浮び上ってくる「再生産の論理」という型において両者に共通のアイデアをみいだすこともできるであらう。³³⁾しかしながらそれも両者の経済動学的方法論的反省の後にのみ、いわれなければならぬことである。われわれはこの意味において、カナダのマックギル大学ケアステッド教授によって従来理論経済学においてうかがいしることのできなかつた問題の新しいと方法の斬新さの上に経済動学的反省の試みがあることをしらねばならぬ。そこにおいて教授が展開した経済変動の一般理論の「与件」分析はわれわれに多くの暗示を与えるものであり、そうして「所与の原因を基礎とする若干の理論」³⁴⁾—カール・マルクス、J・Aシユムペーター——は、一面教授自身がシユムペーターの学的整序に宿っている事実分析のためのトラックを指摘されたものとしてうかがうことができると思う。以上教授の語るところに耳を傾けながらわれわれの問題とするところ

を鮮明にしよう。さて教授は、「直接的でしかも第一
次的な仕方では経済の過程に作用する一群の原因がある。
これらの原因は経済学の文献の中で、常に特殊な意味
をもたされてきた。これらの諸原因が経済秩序の外に
あるものであるかどうかという問題は、暫く未決定で
おくとしよう。それらは、ある特定の行動の規則性を
もつ、物理学的・生物学的ないし自然科学的現象から
構成せられる諸原因より成っていて、深い経済的帰結
をもっている。それらは物理学的な収穫逦減の法則と
か、心理学的または生理学的な効用逦減の法則が靜態
的な経済理論に対してもっているのと全く同じような
關係を、経済變動の理論に対してもっている。換言す
れば、これらの諸現象は、それから逆に経済的帰結に
ついての結論が流れ出る一定の広汎な一般化がなされ
うる。経済学者は、それらがどうして生じてくるのか、
また、それらがどのようにあるのは何故かということ
を、とりたてて検討しようとはしない。普通、彼はそ
れらを与えられたものとしてとり上げる。だからわれ

われはそれらを、『経済變動の所与の諸原因』“Given
causes of economic change”と呼ぶのである。」「われ
われは、後に用いられる分析の方法に大きな影響を与
えるものとして、これらの諸現象の経済變動理論に対
する關係と、収穫逦減のような諸現象の経済靜学に対
する關係との間には、論理的に、ある重要な差異が存
在することに注意しなければならない³³⁾」とのべている。
そうしてその「経済變動の所与の諸原因」が、變動に
ついての存在を假定することから導かれる結論という
のは、「論理的に、すなわち、厳密な決定性を伴って
假定せられた諸条件から導かれるものではない³⁴⁾」ので
あってそれらは、「經驗的な事実の中で与えられた原
因から流れる諸帰結についての、種々な程度の確から
しきをもつ推測であるにすぎない³⁷⁾」このようにして
自から分析のための方法は、靜学的研究に關する、嚴
密な意味での正確な方法ではありえないのであり、純
粹に歴史的な方法、すなわち、これらの諸原因の存在す
る各種の歴史的過程の帰納的な研究であるか、——こ

れば、歴史的過程には常に複雑な因果関係が存在するという理由、および一般化が不可能であるという理由からして、それ自体不十分な方法である——または、所与の原因を仮定しておいて、そこから起りそうな帰結を（論証するというよりもむしろ）推論しようとする變動の単純な模型を作成するという方法でなければならぬ。このような観点からして教授は、經濟變動の一般理論の理論的構造は後者の方法であると指摘する。ここにおいて經濟變動の一般理論の使命は次の三命題を満足させるものでなくてはならない。すなわち（一）所与の變化がいかに經濟秩序へ作用するか。（二）所与の諸原因がいかに相互に反作用し合うか、およびそれが寄り集まって經濟秩序にいかに影響を与えるか。（三）所与の原因が完全には經濟秩序の外にあるものではないことが認められなければならないならば、逆に与えられた諸現象の變化が、どのようにして經濟過程それ自体の結果として生じてくるであろうか。しかしながら教授もいうように確かにこの種の研究は理論經濟

学の限界を越えたものであった。なるほどシュムペーターは『經濟發展の理論』第二章——經濟發展の根本現象——において「社会過程は吾々の生活並びに思维を合理化することによって、社会發展の形而上学的考察“the metaphysical treatment of social development”から吾々を解放し、且つ之と併立し之を離れて存立するところの經驗科学的考察の可能“the possibility of an empirical treatment”を觀ることを吾々に教えた」³⁶⁾とのべた。そうして「發展思想が吾々の領域に於て今や不信用に陥り且つ特に史学の側から再三再四原則的に拒否されているのには更に他の一つの理由がある。それは、發展思想を繞る各種各様の色彩の非科学的乃至超科学的の神秘論の潮流に合流するものとしてな愛好事癖 (Dietentismus) と云う潮流のあることこれである。發展という言葉が役割を演じている總ての概括化はこれがために輕率な、基礎付けの不充分なものとなるに至ったのであって、それが吾々の多くのものをし此の言葉、概念及び事象の總てに對して一括して寛

忍 (Vaitanee) を失わしめるに至ったのである」と警告の言葉をなげかけたのである。そうして、経済発展の問題設定におよんで彼は、純粹に経済的なものの變動およびその結果として生れる諸現象に問題の焦点を覗い出したわけである。しかしながら彼はその純粹に経済的なものの變動のどのような變動が近代国民経済をして今日の状態の位置づけをなさしめたのか、あるいは、このような變動の諸条件が何であるのか、という問題を発するのでもなく、まさに、どのようにしてこのような變動が成就されるのか、またそれはいかなる経済現象を其処に展開させるのか、ということにかかわってのことであるとしたのである。

さて以上のようなシュムペーターの問題設定が、本根的に彼の経済動学の形成の過程において充分魅力的な本質問題としてのみ考えられていたのであろうか。ケアステッド教授によればシュムペーターが経済理論の中に閉じこもらないで歴史的社会学を研究したり、経済の将来について仮定を作った経済学者に対して冷

酷な告発を表しながら疑いもなくこの禁断の園の魅力に自分自身がひきつけられ誘惑の途に立たされているという。すなわち教授はシュムペーターが『経済発展の理論』の第二章の長文の脚註において経済過程の新しい全体的把握を構想するにいたった学説史的検討を論述した最後の一節に「この問題は寧ろマルクスによって為されたものと並行する。何故なら彼にあって問題たるは、内発的な経済的發展が存在することであつて、それ自ら変化する与件への単なる適応のみではないからである。然し私の建造物は彼の建造物の表面の一小部分を相覆うに過ぎない。」¹¹⁾というを指摘しマルクスの経済變動に関する真に「経済的」理論に対してシュムペーター自身は充分魅力を感じておると述べて、警告をば自分自身があびねばならない立場に立とうとしているという。このような観点からケアステッド教授は、「われわれが経済科学の限界をいかに明確に限定しようと努力しても、全体的な注目の母胎の中における経済的諸力が、非常に深遠であり、浸透的であり、

また『非経済的』な諸刺戟に反応する『純粹経済的』な刺戟があまりにも敏感であるから、われわれは、経済的過程が社会的進化の中に作り出す諸効果に留意して、そのような経済過程を経済変動の一原因と考えなければならぬ。……経済学的説明の領域の中に原因的要素を導入しながら、所与の原因に基づく諸變動理論がいかにか『内部的経済発展』の理論を發展せしめたかを研究する⁴²⁾と自己の態度を表明している。そうして経済變動の一般理論は、諸原因の相互作用を説明し、また全体としての経済秩序の内部におけるそれらの位置を説明すべき一つの統合的な要素を設定しなければならぬということを示そうと努力するのであるという。

さてわれわれは、以上ケアステッド教授の意図するところを長々紹介したわけである。ともかく教授のそのような態度からしてシュムペーターの学説をみれば一体どのようになっていることが出来ようか。これが次の問題になる。シュムペーターは確かに純粹均衡分析から、靜態研究と動態研究との明白な区別のもとに後者にお

ける内生的諸要因の定義、所与の原因に基礎づけられる包括的な發展理論へと移向したのである。『定常状態』を仮定するに当って、シュムペーター教授は、時間の経過と共に、この均衡よりの乖離を生ずる諸原因を検討する方法を採用する。⁴³⁾われわれがすでにふれたようにその均衡よりの乖離を生ずる諸原因の検討は、いわばどうして存在するにいたったかという設問において尋ねられるものではなかった。すなわちいかなる経済現象をそこに展開させるかということにかかわって把えられるべきであった。そこでシュムペーターは“stationary flow”に対して経済社会がいかにか反作用して、發展するかを見ようとして、単一の変動原因（single cause of change）を導入するのである。その場合、その原因がどうして存在するようになるかということには興味はないわけである。そして「それがその模型それ自体の内部から生じうるということは認めようとはしないようである。勿論、このことは、その模型の性質を考えれば全く適當なことである。適切でな

いのは、その原因が与えられた現実の経済社会の内部においてでなくて、常にその外部において生じなければならぬと想定することであろう。「しかしながら」時としてシュムペーター教授は、彼の模型と現実の社会との間のこの混同に、危険にも接近し、そして変動の諸原因は常に経済体系の外部にあるという考えに近づいているように思われる。⁴⁴⁾とケアステッド教授はいう。われわれはこの小論において教授のシュムペーター理論に対する理解のほどを論議しようとするものではない。

なるほどシュムペーターは *innovation* を経済的事実としてこれに明示的な規定を与え単一の経済変動原因とした。しかしながら、そのことはマルクス経済学における、いわゆる「単純再生産」論理の “stationary flow” の均衡関係に入る動態的推進力がまさしく生産者に利潤を約束するもの、あるいは「後れたものが損失を防止するための必要手段としての」革新の誘因であったと考えるならば、その限りにおいてシュムペーター

ーとマルクスの経済変動の論理は明かに一にしたものということができよう。それにしても問題は別の面において起ってくる。すなわちシュムペーターは、経済的事実としての “*innovation*” を単一の変動原因として抽出して生産の新結合を展開しうる可能を論じたことは、いわば一箇の変動の模型を作出したにとどまるのではなからうか。もちろん彼は決して変動の原因の複雑性を否定しているわけではない。しかしながらそれらの変動原因はきわめて経済社会との関連において限定性をもったものとしてあらわれる。したがってそのことは、経済体制の内発原因とは明かに区別して考えねばならないことであった。シュムペーターはどのように考えてくると純粹に経済的なものの経済体制内部的関連にもとづく変動原因を究明したということではできると思う。しかしながらそれが果して包括的な経済変動理論の可能性を満足させたか否かということとは別の問題である。それは単一な原因を認めての方法が果して他の諸原因を包摂するものであるかどうか

かにかかわることもあろう。「単一原因のみを認める模型」というこの方法の限界は、諸原因間の関係、すなわち、革新の人口とかフロンティアの拡大への効果を、何らかの特定性をもって明かにすることができないということである。人は、もし他の諸原因が作用するならば、それは、全く独立の形で働くという感じをうけるに止まる。変動の諸原因間の相互関係は除外せられる。「シユムペーター教授の一般的な樂觀論は、恐らくは、現実の世界に存在する他の諸原因が作用することを認めるような他の諸諸の模型の研究によって暗くされるであろう」⁴⁵⁾これがケアステッド教授のシユムペーター理論に対する批判であった。ようするに教授は、シユムペーターの經濟変動の理論は「単一原因のみを認める模型」であることに大きな欠陥が存し、諸原因の相互関連の問題“inovation”以外の諸原因が作用する模型の問題にはなんらふれておられないといへばきであってどこにこそ現実認識および理解のための学的整序のクラックが存在するということになる。

われわれはマルクスとシユムペーターが經濟の内発的原因にもとづく經濟發展を問題としたということにおいて両者を問題としてとり扱うかぎりにおいては、きわめて消極的に解してかからねばならないとのべた。そうしてそのためには、両者の学的体系的な方法的反省を経なければならぬという態度からこのことを考察してきたわけである。しかしながらこの小論においては、唯シユムペーターの場合のみをとりあげたに過ぎないわけであるから筆者が真実意図する問題の解決は露呈していない。筆者の現在の能力でマルクス經濟学的方法論的反省・吟味をなすというようなことは、当低及びもつかないことである。他日を期して努力をするよりほかわない。この小論では、問題の性質上一層の理解を他日に期しながら、一里塚ともならばといふささやかな気持から次に結論的覺書述べておく。

五 結論 的 覺 書

蟹は甲に似た穴を堀る。といわれるが全く甲さえできていない蟹が穴を堀っているに相似たものであるかもしれない。(甲なき蟹は蟹の存在を否定するが)ともかくシュムペーター経済学を方法論的に考察するのが目的であった。そのためにこれをマルクス経済学との関連において反省を試みてみようと思図したわけでもあった。けれどもそれは唯砂を足でカグツタだけのことであって、なんら穴になっていないものにすぎない。

われわれはともあれ、いわゆる「学説」を検討し論証するにあたっては、その学説の問題意識が那邊にあるかを吟味してかからねばならないであろう。いわばヴィジョンの帰結を原理的に把握してみなければならぬ。しかしながらそれは、あくまでも分析武器との関係概念においてのみ明らかになることである。われわれはこのことを、シュムペーターのいわゆる「動態

理論」にしたがって、方法論的にとりだしてみようとしたわけである。彼が「単一の変動原因」を抽出して「模型」を作出したところに理論形成の使命が存したことを指摘するならば、そこにこそ問題への接近の仕事と選択の方途があったとことができよう。それが真に現実接近のための認識ないし理解の用具の作成であったか否かは別の問題である。そうしてかような用具を駆使しての現実態の認識、理解を意図するということはまた性質を異にする。

われわれはシュムペーターの用具の検証にあたって、ケアステッド教授の所論を紹介してこれに吟味を与える資料となした。教授は専ら経済変動の一般理論は各種の変動の主要な諸原因を関係づけ、それらの相互関係を探究することによって諸変動がそれ自体、経済体制を通じてどのように作用するか、および厚生に対するそれらの諸効果について一貫した説明をなすものではなくてはならないという立場からしてシュムペーターの理論を反省し、批判を加えるのであった。その批判

がいわば含蓄と暗示を与えたものとしてわれわれがうけとるか否かについての論議は紙幅の関係上他日に譲ることにする。

ともあれわれわれは、シュムペーターの学説の近代理論経済学上におけるユニークな相を対象処理の整序の問題として考察してきた。彼の経済学は、全面的に肯定されるか否定されるかというような、決定的態度においてとりあげられるのがしばしばであるが、まさしくその通りというべきであろう。それだけに彼の学説的意義は深いといわなければならぬ。すなわち彼が歴史的社会学の研究に魅力をもちながらも純粋に経済的ものの抽出による動態理論を企図しそのことに終始したということは、それ自体大きな問題を提出したこと⁴⁵⁾というべきである。そうしてランゲも認めているように企業者機能のいわば経済的行為主体をとりあげてこれを展開したということは制度的与件の構造分析を含んでいるということができると思う。したがって彼の立つ経済学の地盤はマルクス経済学のそれと

質的に異なるものであるにかかわらず上層理論のいわば建築物はきわめて接近したものになっているということができるであろう。しかしながら両者は全く問題への接近の仕方の異った選択にもとづくものであって、いわば対象処理の学的整序の色彩を異にした立場においてであることをわれわれが認める以上、そのことはきわめて消極的な意味において解されねばならないと思う。

彼が経済の瞬間描写的な観察から経済体制内部的な変動要因をとりだした貢献は、充分認めなければならぬ。またそれなるが故に問題は起るわけでもある。われわれは未分析であるいわゆる「与件」をどのように純粹理論経済学上において問題となすべきであるかということ⁴⁶⁾を今後の動態理論の課題として担っている。この小論はもとよりシュムペーター経済学的方法論的反省の一駒にすぎない。深淵な課題に対する一里塚ともなればというささやかな望みにすぎない。

(註)

(1) Laurence Klein, "The Keynesian Revolution," 1947

(2) Gottfried Harberler, "Prosperity and Depression," Ist ed. Geneva, 1937, p. 9. 『景気と不景気論』桑原晋訳

(3) シュムペーターにしたがえばマルクス体系の独自の特徴は、これらの歴史的事件や社会制度自体をも綜合分析の説明過程の中に入れてゐること、あるいは専門語をもつてすれば、それらを与件としてではなく変数として取扱つてゐることに存する ("Capitalism, Socialism and Democracy 3rd. ed. 1950, P. 44. 中山、東畑訳書 (上) 八五頁)

(4) 岸本誠二郎著「マルクスと現代の経済学」経済評論二卷十二月号二八頁参照。

(5) "Science and Ideogy," は一九四九年 American Economic Review, 345—359. 誌に所載されたシュムペーターの晩年の論文である。Richard V. Clemence の編集になる "Essays of J. A. Schumpeter," 1951 に彼の生前の諸論文とともに収められてゐる。筆者はこれにしたがった。

(6) シュムペーターは「経済変動の分析」 "The Analysis of Economic Change," (Review of Economic Statistics, XVIII, 1935), 2—10 : reprinted in Readings in Business Cycle Theory (Philadelphia : Blackston Co., 1941) P. 7. では「産業の変動は外部要因 "outside factors" の結果、生長の非週期的要素および革新によるもの」

ある」と述べてゐる。彼は "outside factors" と云う言葉を諸論文で用いてゐるがそれは "Business Cycles" に掲げる "external factors" の意に解すれば可い。J. A. Schumpeter, Business Cycles (New York, 1934), P. 7. シュムペーターの "external factors" につゞけては左の文献の参照を乞ふ。"Business Cycles," pp. 7—11, P. 248. P. 261. pp. 317 and 655 "The Analysis of Economic Change", P. 3.

(7) ローザンヌ学派はいわゆる経済生活の斉一性 (uniformity of economic life) を究明する立場にあるのが経済学の科学的根拠であるという観点からして「与件」をとらえる。すなわち人口の構成・総数・個人の経済行為の心理状態・生産技術・経済組織等々は経済そのものの本質的要因ではなく、経済に対して与えられる外部的状態であるにすぎない。いわば経済の枠を変化させる非本質的、偶発的要因である。したがって経済学の任務は、外部的条件の変化を尋ねるところにはなく、その外部的条件の変化として経済体系に生ずる経済的受動的適応の本質を明らかにするところにあるとする。もちろん筆者はシュムペーターの学説がローザンヌ学派の流れにあることを否定するわけでない。ローザンヌ学派が与件の固定をいう場合はあくまでも一般均衡理論のつわゆる経済静学の定立にあつたことを思えばシュムペーターの与件との関係・差異は明らかである。

(8) J. A. Schumpeter, "Theorie der Wirtschaftlichen Ent-

- wicklung, S. 96. 中山、東畑訳書一五八一—一五九頁。
- (9) 中山・東畑訳書一五八一—一五九頁。
- (10) シュムペーターは ökonomisch および wirtschaftlich の概念を経済学の対象であるという意味で使っているがその場合彼は『経済的なるもの』(ökonomisch, Wirtschaftlich) の概念に對峙してゐるのである。
- (11) Alfred Aron, "Objekt und Grundbegriffe der theoretischen Nationalökonomie," 1927. 『理論経済学の対象と基礎概念』山口忠夫訳書一七七頁。
- (12) 同右訳書一七八頁。
- (13) 拙稿『「企業者」と資本主義過程の『革新』について—シュムペーター学説の主要問題—』——『立命館経済学』第二卷・第四号を参照していただきたい。
- (14) J. A. Schumpeter, "Capitalism, Socialism and Democracy," 1912. P. 82. 参照。
- シュムペーターはここで次に述べてゐる。すなわち「およそ資本主義は、本来経済変動の形態乃至方法であつて、決して靜態的ではないのみならず、決して靜態的たり得ないものである。しかも資本主義過程のこの發展的性格は、ただ単に社会的、自然的環境が変化し、それによつて又経済活動の与件が変化するという状態の中で経済活動が管まれる、と云つた事実に基づくものではない。この事実も成程重要であり、これらの変化（戦争、革命等々は屢々）産業変動を規定するものではあるが、しかもなおその根源的動因たるものではない。更に又この發展的性格は、人口や資本の準自動的增加や貨幣制度の氣まぐれな変化に基づくものでもない。これらについても右と同じことが云える。資本主義のエンヂンを起動せしめ、その運動を継続せしめる基本的衝動は、資本主義の企業創造にかゝる新消費財、新生産方法乃至新輸送方法、新市場、新産業組織形態からもたらされるものである」と。すなはち彼が「企業者の革新による単一経済変動原理を述べたものである。
- (15) 同前, P. 162. 中山・東畑訳書(上)二八六頁。
- (16) 『立命館経済学』(第二卷・第四号)所載の拙稿『「企業者」と資本主義過程の『革新』』を参照。
- (17) 本稿では酒井正三郎教授によつて有斐閣(二八・十二)から出版された訳書に負う所が大き。
- (18) Lange, O., Marxian economics and modern economic theory (The Review of Economic Studies, Vo 1. 2, No. 3, Pp. 189—201)
- (19) P. M. Sweezy, "Professor Schumpeter's Theory of Innovation," Review of Economic Statistics, Feb., 1933.
- (20) "Essays of J. A. Schumpeter," Edited by S. V. Clemence 1951. 2取められた "Preface to Japanese Edition of "Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung," Pp. 158—163 参照。
- (21) ハーモールは従来いわれてきた、いわゆる景気変動という問題を純経済的にとりあげてきたのはマルクスと

シムムペーターであるという主張をより一層明確にこの著書なしてゐる。彼は動態経済学を三つに大別する。(一) 大きな動態(二) 時間を含んだ動態(三) 期間分析を中心とする動態。彼は(一)を更に三つにわけづゝるがその一はバレンクスとシムムペーターのつわばな生産函数の交点を中心とする動態を論じてゐる。

- (22) Baumol, W. J.: *Economic Dynamics*, 1851 P. 20
- (23) J. A. Schumpeter, "Capitalism, Socialism and Democracy," P. 61 中山・東畑訳書(上)一〇九頁。
- (24) 向坂逸郎著「シムムペーターとマルクス」九州大学経済学会発行『経済学研究』(第十八巻・第四号)所載。同右論文一頁参照。
- (25) "Essays of J. A. Schumpeter," 1951. Edited by R. V. Clemence P. 268.
- (26) "Business cycles," P. VI.
- (27) "Essays of J. A. Schumpeter," P. 272
- (28) *Ibid.* P. 272.
- (29) J. A. Schumpeter, "Capitalism, Socialism and Democracy," P. 61. 中山・東畑訳書(上)一一〇頁。
- (30) *Ibid.* P. 61.
- (31) Er. Lutz; : *Das Konjunkturproblem in der Nationalökonomie*, 1932.
- (32) 石田興平著「再生産と貨幣経済」(有斐閣二七・十一)参照。
- (33) B. S. Keirstead, : *The Theory of Economic Change*,

1948. Pp. 85—98.

- (34) *Ibid.* Pp. 63—64. 酒井正三郎訳書八一頁。
- (35) *Ibid.* P. 64.
- (36) *Ibid.* P. 61.
- (37) *Ibid.* P. P. 65—66
- (38) J. A. Schumpeter, "Die Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung," 1935. S. 83. 訳書一四六頁。
- (39) 同右訳書一四六頁。
- (40) 同右訳書一五二頁—一五三頁。
- (41) B. S. Keirstead, : *The Theory of Economic Change*, Pp. 66—67 訳書八三頁。
- (42) *Ibid.* P. 94. 訳書一一八頁。
- (43) *Ibid.* Pp. 95—96 訳書一一九頁、教授は補註を以て「この著書のバレンクスは『Theory of Economic Development』の「Business Cycles」の「5」を参照。

(一九五四・二・四)